

樽前山の火山活動解説資料（令和8年9月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。
なお、山頂溶岩ドーム周辺では高温の状態が続いていますので、突発的な火山ガス等の噴出に注意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1、図2-①～⑥、図3～6）

監視カメラによる観測では、各火口や噴気孔群の噴気の高さは火口縁上100m以下で経過しました。噴気の高さは2021年秋頃にやや増大し、現在もその状態が続いています。

10日に国土交通省北海道開発局の協力により実施した上空からの観測では、山頂溶岩ドーム周辺の状況に特段の変化はなく、風不死岳付近にも噴気や変色域等の異常は認められませんでした。

・地震及び微動の発生状況（図2-⑦～⑨、図7）

火山性地震は少なく経過し、震源は山頂溶岩ドーム直下の深さ0km付近に分布しました。
火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図8）

GNSS連続観測では、火山活動の高まりを示すような変化は認められません。



図1 樽前山 南側から見た山頂部の状況（別々川監視カメラによる）

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』、『数値地図 25000（行政界・海岸線）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

今回の火山活動解説資料（令和8年10月分）は令和8年11月10日に発表する予定です。

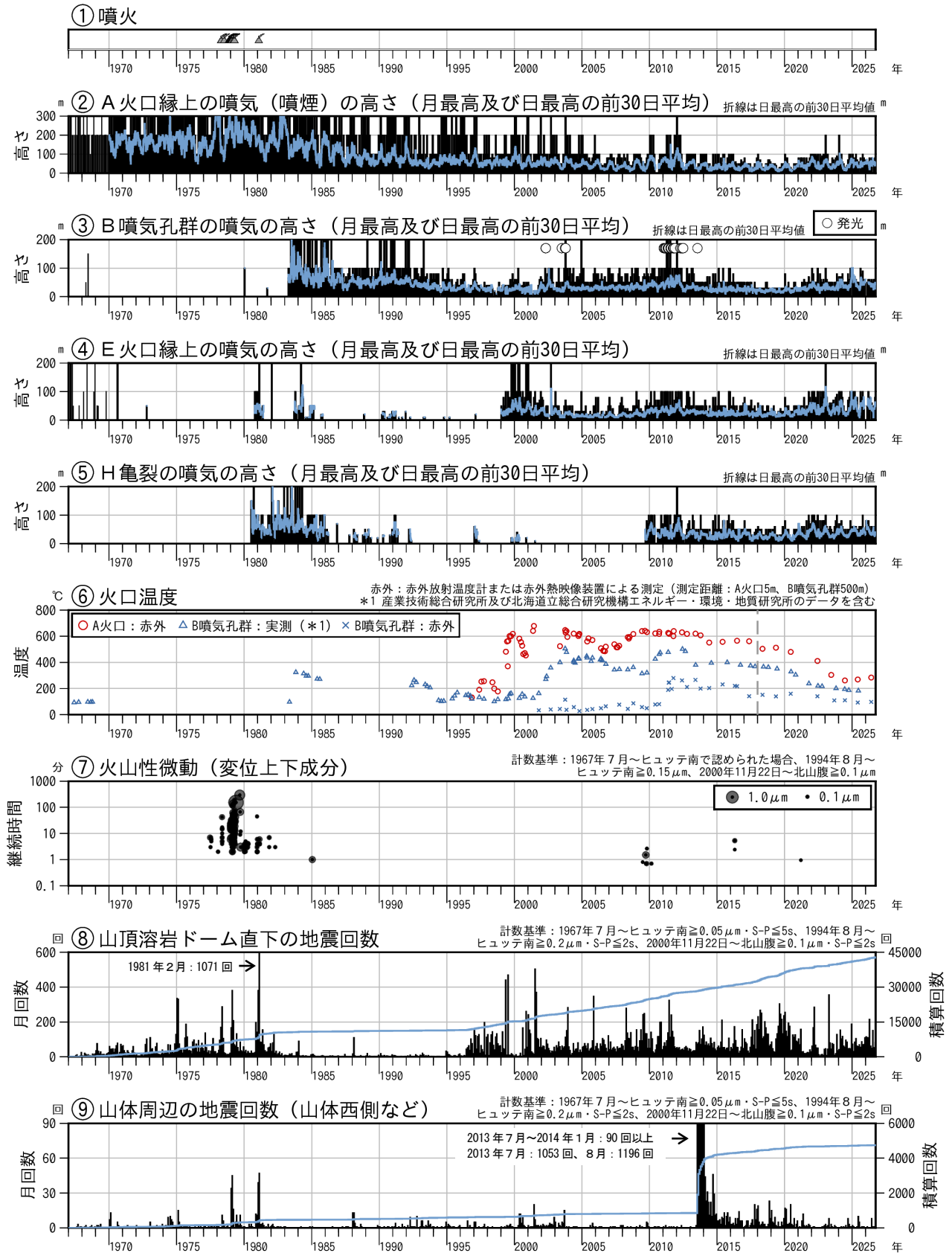


図2 樽前山 火山活動経過図（1967年1月～2026年9月）

⑥：2018年（破線）前後では測定機器の変更により、測定温度に差が生じている可能性があります。
⑧⑨の棒グラフはそれぞれの基準で計数した火山性地震の月回数、青色の折れ線は積算回数を示します。

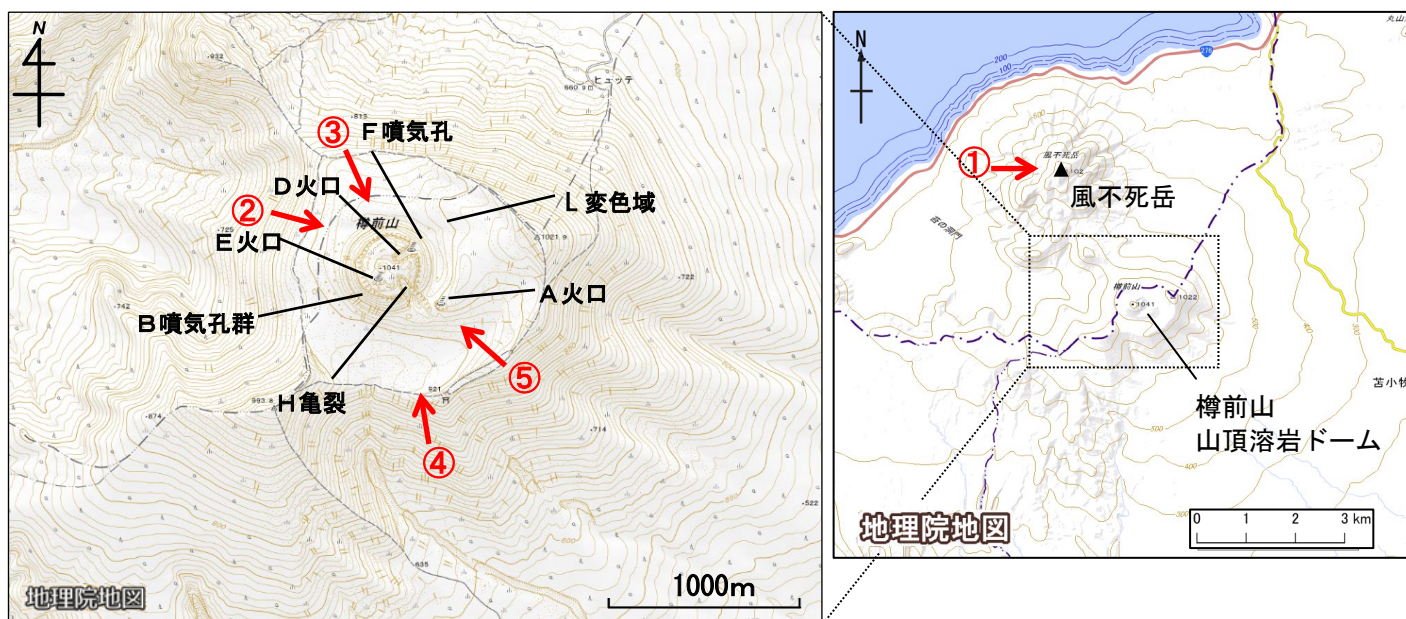


図3 樽前山 山頂溶岩ドーム（左）及び風不死岳（右）周辺図と赤外熱映像及び写真の撮影方向



図4 樽前山 西側上空（図3の①）からの風不死岳の状況

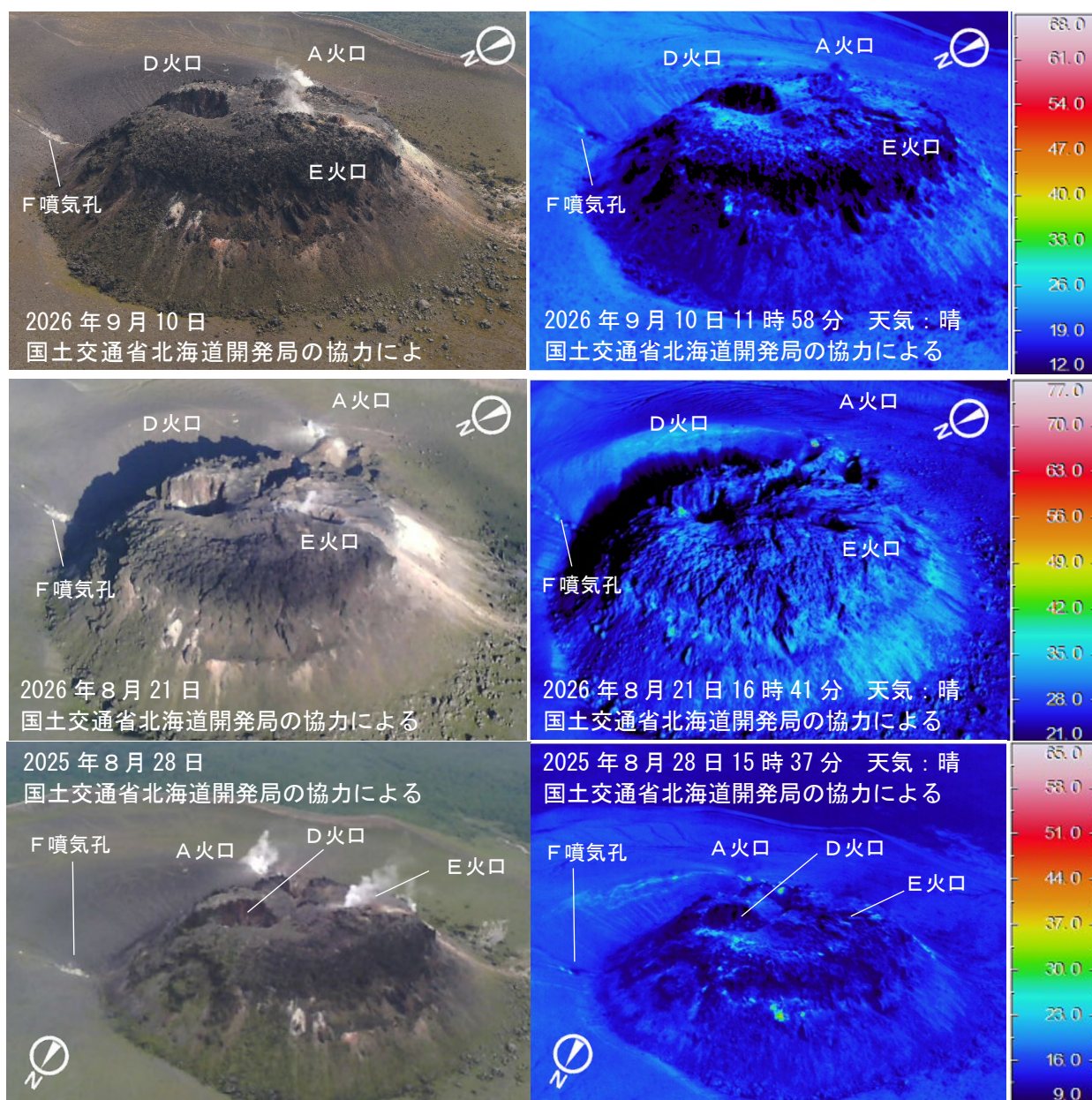


図5 樽前山 赤外熱映像装置による山頂溶岩ドーム北側の地表面温度分布

上段・中段：北西側上空（図3の②）から撮影

下段：北側上空（図3の③）から撮影

- ・ 前回の観測（2026年8月）と同様に、昨年の観測（2025年8月）と比較して、山頂溶岩ドームの地表面温度分布の状況に特段の変化は認められませんでした。

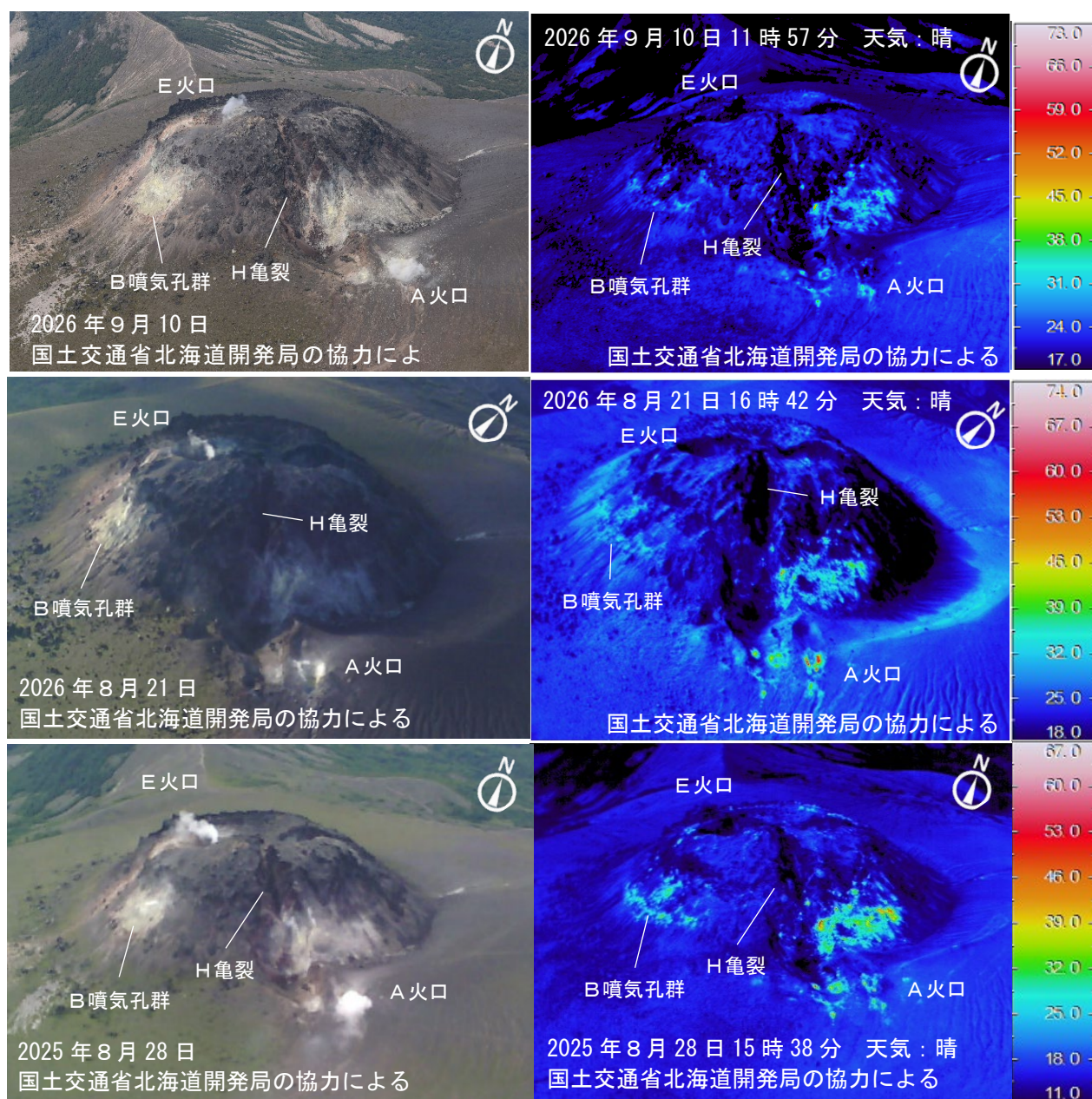


図6 樽前山 赤外熱映像装置による山頂溶岩ドーム南側の地表面温度分布

上段：南側上空（図3の④）から撮影
 中段：南東側上空（図3の⑤）から撮影
 下段：南側上空（図3の④）から撮影

- ・ 前回の観測（2026年8月）と同様に、昨年の観測（2025年8月）と比較して、山頂溶岩ドームの地表面温度分布の状況に特段の変化は認められませんでした。

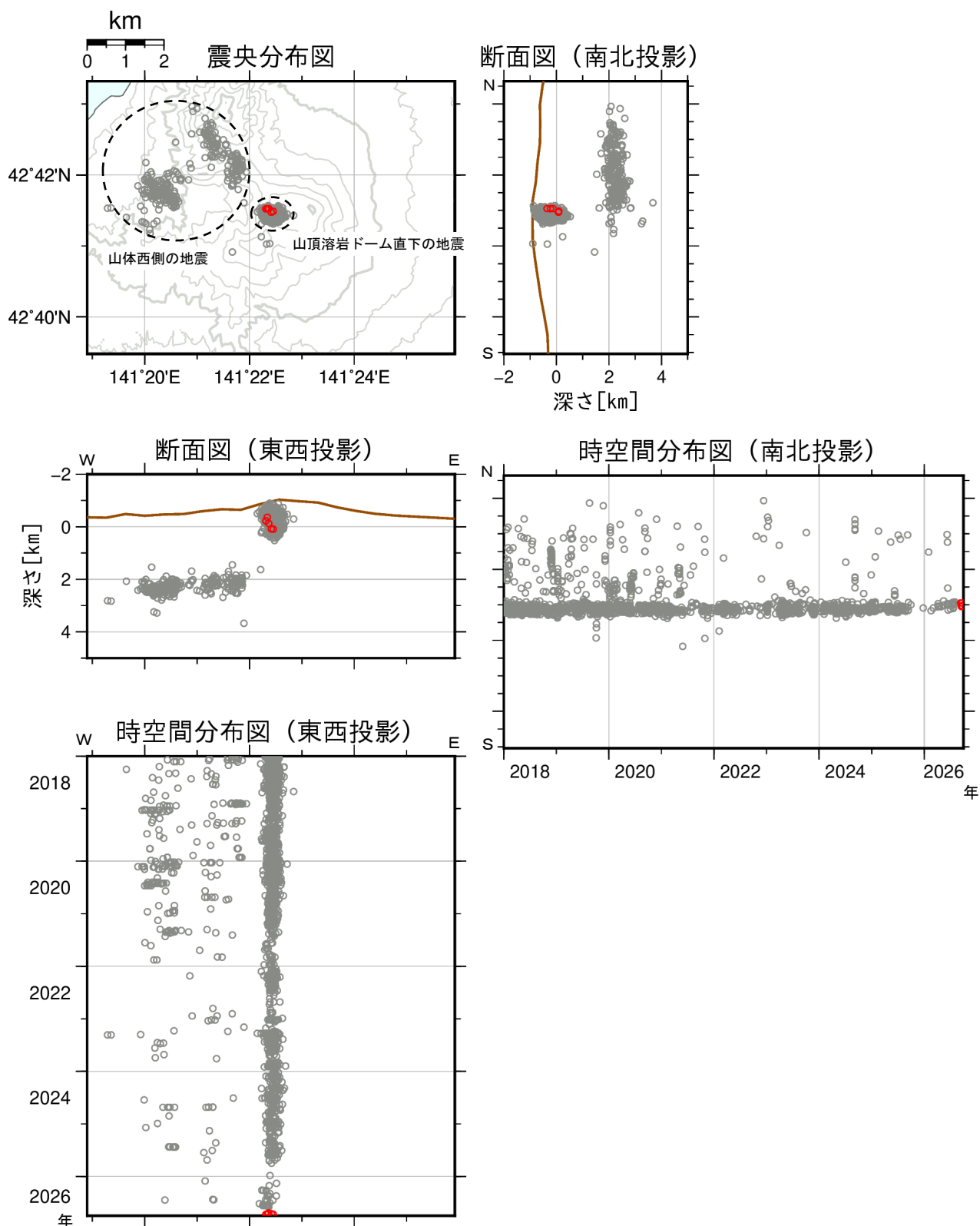


図7 樽前山 火山性地震の震源分布（2018年1月～2026年9月）

○：2018年1月～2026年8月の震源 ○：2026年9月の震源

2025年10月頃以降、一部観測点の欠測のため、震源の求まった数が減少しています。

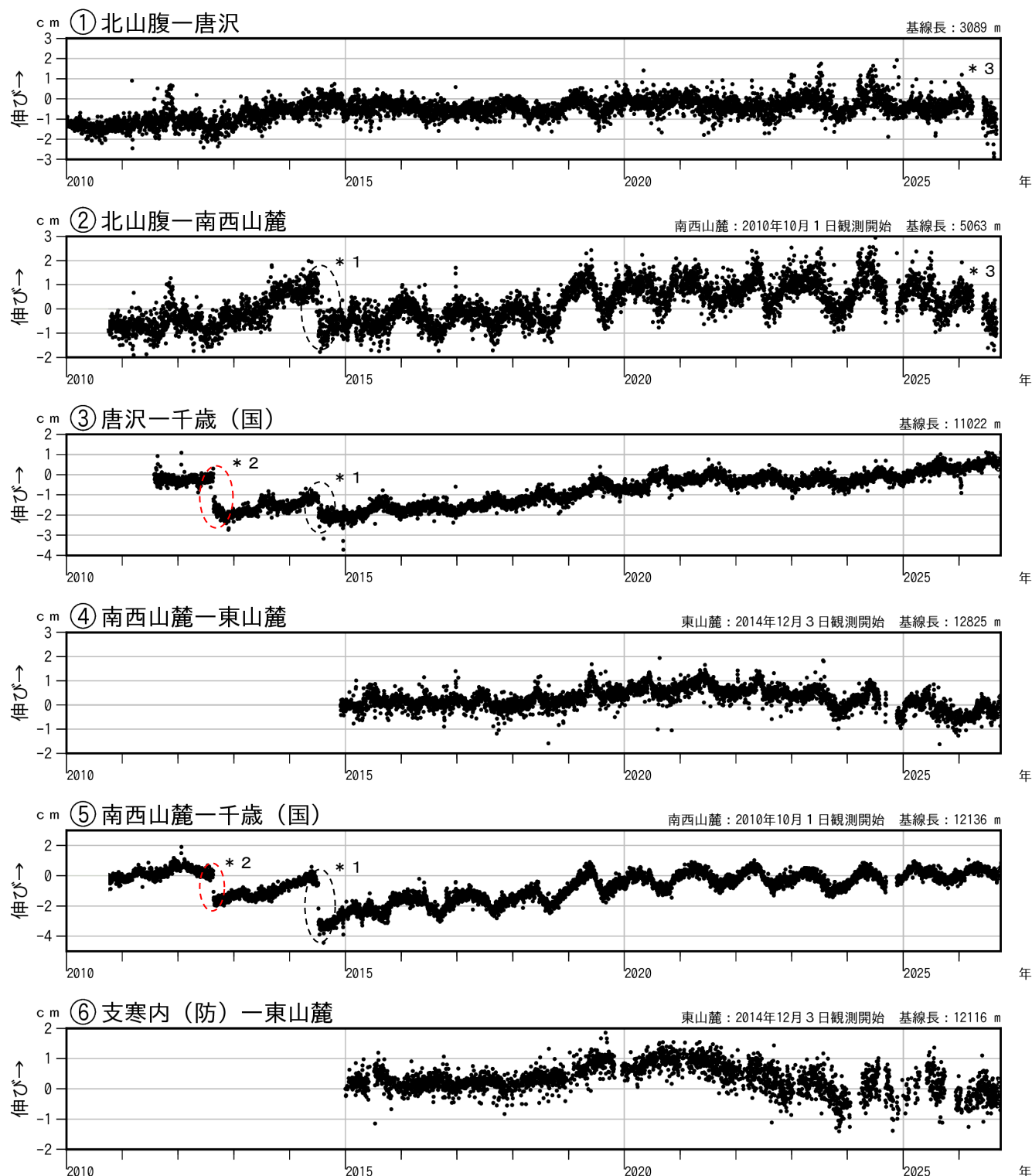


図8-1 樽前山 GNSS連続観測による基線長変化（2010年1月～2026年9月）

グラフ①～⑥は観測点配置図（図8-2）の基線①～⑥に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示しています。

* 1：黒破線内の変動は2014年7月8日に発生した胆振地方中東部の地震によるものです。

* 2：赤破線内の変動は機器変更によるものです。

* 3：①②の2026年3月以降みられる縮みの変化は、北山腹観測点に起因する変化と考えられますが、原因は不明です。

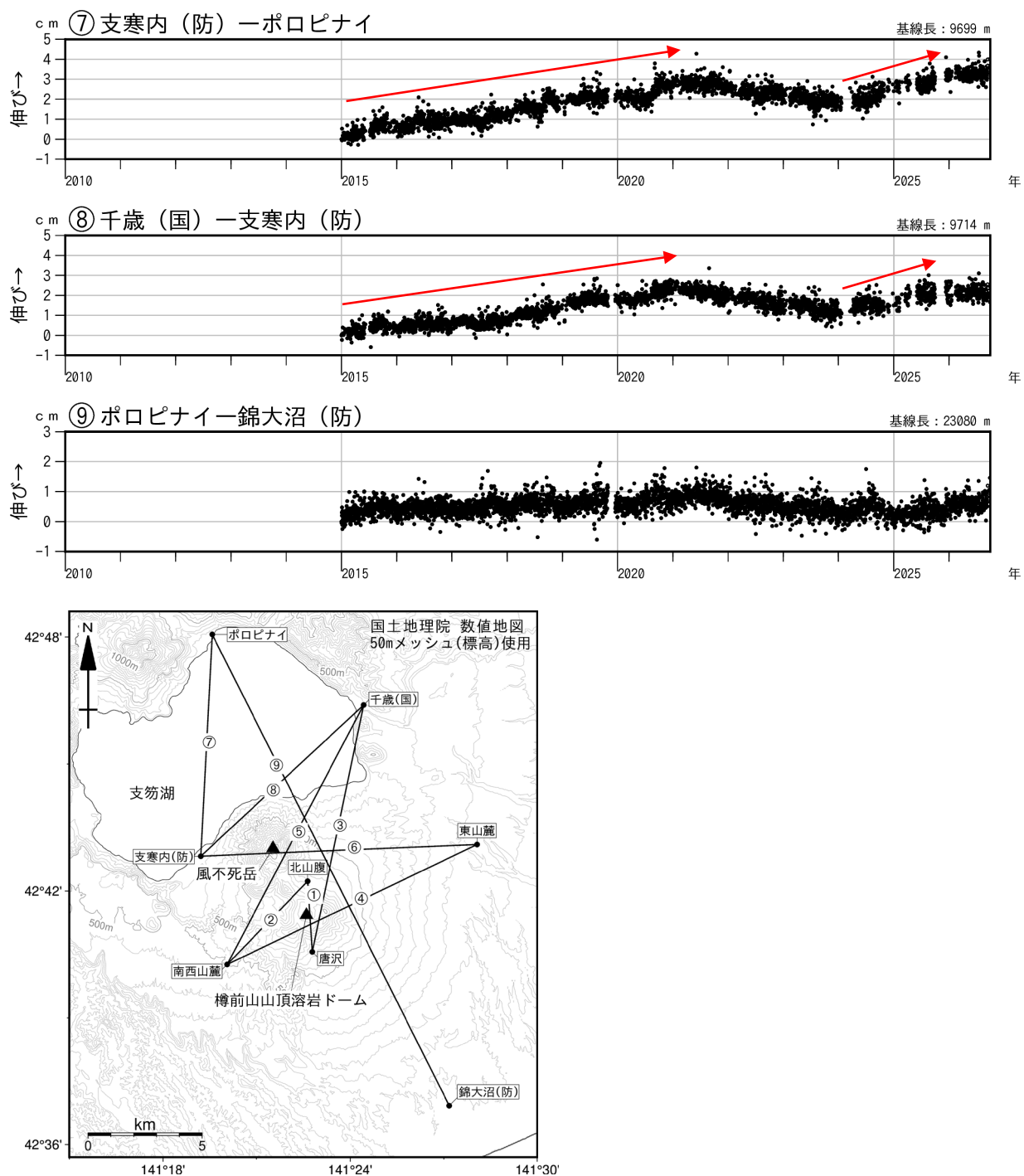
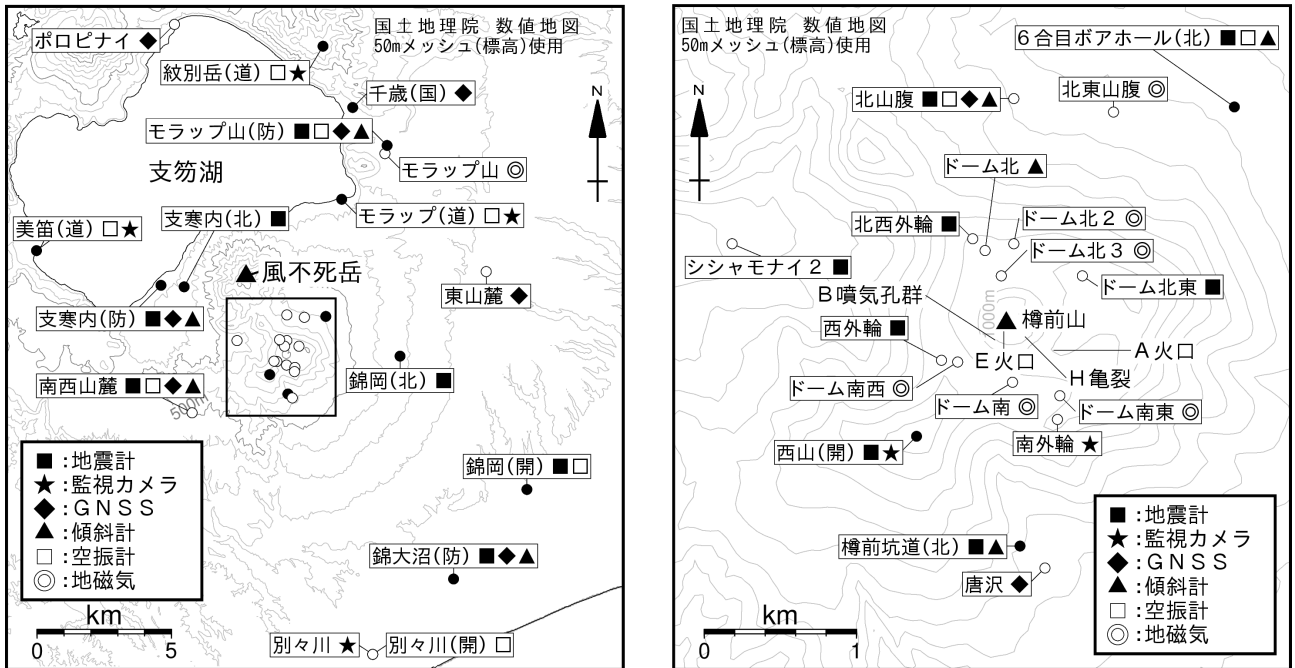


図8-2 樽前山 GNSS連続観測による基線長変化（2015年1月～2026年9月）及び観測点配置図
 グラフ⑦～⑨は観測点配置図の基線⑦～⑨に対応しています。
 グラフ中の空白部分は欠測を示しています。
 ・支笏湖周辺を挟む一部の基線（主に基線⑦⑧）では、数年程度継続するゆるやかな伸長が時々認められます（赤矢印）。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。左図中の四角囲みは右図の表示範囲を示します。
(開):国土交通省北海道開発局、(国):国土地理院、(北):北海道大学、(防):国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道):北海道

図9 樽前山 観測点配置図